

平成 26 年 7 月 9 日から 7 月 21 日までの約 2 週間、アメリカのアラバマ州にある Samford 大学と周辺病院にて臨床研修を行った。私は、アドバンスト研修を通して実際の臨床現場にて薬剤師の先生方がどのような視点で患者に介入するのかを学び、日本の医療を日々、肌で感じる事ができた。そして、そのような環境にあるなかでアメリカの医療に目を向けることで、そこから見えてくる日本の医療の良さを見つけたいと思った。また、アメリカの医療から学ぶべき点を見つけ、今後の課題にしたいと考え、今回の海外研修を志望した。

研修内容としては、多くの時間を大学での講義という形で過ごした。また、St.Vincent's という病院と Princeton Hoover というクリニックを見学した。

大学での講義では、アメリカの薬学教育や医療安全に対する薬剤師の役割、甲状腺疾患、抗凝固療法、小児医療、化学療法時の制吐剤、心不全に対する治療など多くの領域について学ぶ事ができた。日本の授業は受動的であることが多く、生徒は手を挙げて質問をしたり、意見を述べたりすることに対して消極的である。しかし、アメリカは生徒の自主性を重んじ、考える力を引き出す講義であるということを実感した。そして、生徒同士が話し合うことで、知識の共有ができ、新たな考え方を発見することもできた。研修中は、10 人で分からない部分を補い合い、一つ一つの講義を充実したものにする事ができたと思う。

次に、St.Vincent's での病院見学である。St.Vincent's は多くの診療科をもつが、癌領域で活躍されているがん専門薬剤師の先生に同行し、癌センターの見学をさせていただいた。特に印象に残ったことは薬剤師が外来に同席し、医師が薬剤師と話し合いながら診察を行っていたことである。そして、診察終了後、医師の部屋にて医師と薬剤師が今後の治療方針について話し合っていた。さらに驚いたことは、実習を行っている薬学生も医師から意見を求められていたことである。見学を通して、このような光景を目の当たりにし、以前から耳にしていた“アメリカの薬剤師の地位の高さ”を自分自身で感じる事ができた。そして、同時に大きなショックを受けた。日本では薬剤師が外来診察に同席することや、医師と治療方針について長い時間、話し合うということは少なく、どこか医師に気を遣い、薬剤師の視点から意見をすることを躊躇している部分があると思う。今後、日本の薬剤師がより積極的に薬物治療に介入し、自分自身の持つ情報を提供することでチーム医療をさらに発展させることができるのではないかと感じた病院見学であった。

次に、Princeton Hoover でのクリニック見学である。ここでは、生活習慣病患者（高血圧、高脂血症、糖尿病など）に対する薬剤師の関わりを見る事ができた。驚いたことは、一人一人の薬剤師に Patient Education Center という個人部屋が設けられており、患者はその部屋にて特定の薬剤師からの指導を受けるため、医師の診察のように予約制になっていることである。そのため、個々の患者と多くの時間を共有する事ができ、より深く介

入を行うことができると思った。そして、次回の指導日までの間は、電話にて患者と連絡を取り合い、自宅での様子や自己測定値（血糖値、INR 値など）を把握し、アドバイスをしていた。指導内容としては日本と大きく異なる点はなかったものの、アメリカの薬剤師が持つ自分自身の患者であるという意識の高さと薬物治療へ介入することに対するモチベーションの高さを実感した見学であった。

このように本研修を通して、日本とは異なる部分を知ることができたが、日本の良さも見つけることができた。一つ目に「お薬手帳」である。日本ではお薬手帳が普及し、災害時にもその役割は大きかったと言える。一方で、アメリカにはお薬手帳がなく、患者の薬歴を把握するためには、かかりつけ薬局に何度も電話をかけたり、患者へ聞き取りをするとのことであった。アメリカの薬剤師の先生は、日本のようにお薬手帳があると情報を得やすく、効率的であるとおっしゃっており、お薬手帳の有用性を改めて実感した場面であった。二つ目に「ダブルチェック」である。日本では監査体制を十分に設けており、リスクマネジメントに努めている。しかし、アメリカではテクニシャンにより薬が取り揃えられた後、小児への処方薬や抗がん薬、ハイリスク薬以外はダブルチェックをほとんど行っていないという状況であり、調剤過誤の危険性をはらんでいると感じた。私は研修に参加するまで“アメリカの医療は日本の医療よりも良いところばかりだ”と思っていた。しかし、日本には日本の良さがあることを知り、医療が一步步進歩していく中でも、その「良さ」は変わらず残していきたいものであると思った。

今回の研修のなかで、病院見学の際にアメリカの薬剤師の先生から受けた“日本の薬剤師はもっと多くの時間を患者と過ごすべき”という言葉が今でも心に残っている。実際、患者との面談を通して、表情や体調、不安を知ることができ、カルテ上にはない情報を得られるということをアドバンスト研修を通して実感した。しかし、日本の病院薬剤師は、調剤を始め、抗がん薬の調製、病棟など多くの業務を行うため、患者と接する時間は限られており、学生研修のように一人の患者に長い時間をかけ、深く介入することがなかなか難しい状況であると感じる。ただ、今後、医療従事者の一員となる身としてアメリカの薬剤師の先生からこのような言葉を受け、患者との時間を何よりも大切にしたいと改めて思い、実践していかなければならないと実感した。

人により理想とする薬剤師の形は異なるかもしれないが、多くの薬剤師は臨床現場にて必要とされることを望んでいるだろう。今回の研修を通して、日本とアメリカのそれぞれの良さを発見することができ、日本の薬剤師が今以上に活躍の場を広げるためにはどのようにしていけばよいのかを自分なりに考えることができた。

来年から一人の薬剤師として臨床現場に出るにあたり、今回の研修で学んだこと、感じたこと、考えたことは私にとって大きな財産となるだろう。私たち若い世代の薬剤師が、薬剤師の在り方を再度考え、日本の医療の良さを残しながら一步步前進することで、今後の薬剤師の存在を変化させられるよう努力したいと思った。

最後に、学生時代にこのような貴重な機会を与えてくださった名城大学の先生方及び

Samford 大学の先生方に深く感謝いたします。